

2014年度春季研究発表会プログラム

5/24(土)

セッションNo	講演No	開始時間	終了時間	講演者	タイトル	発表要旨
開会挨拶など (星野悦子先生)		13:00	13:05			
セッション1 座長 松永理恵先生	講演1	13:05	13:30	長嶋洋一(静岡文化芸術大学 大学院デザイン研究科)	聴覚的クロノスタシスに関する実験 報告	メディア心理学実験の一つとして、サッカー直後に目に した最初の視覚情報が時間的に長く続いて見えるクロノスタ シス錯覚について、聴覚刺激においても起こると報告した先 行研究について追試した。これとともに、さらに実験条件を 拡張した被験者実験をデザインして、より一般的な聴覚的ク ロノスタシスについて検証考察した。
	講演2	13:30	13:55	亀川 徹, 丸井淳史(東京藝術 大学音楽学部)	音場再生方式と音楽的文脈が距 離感に与える影響について	音声再生方式の違い(2ch(チャンネル)ステレオ、5ch サラウンド、そして高さ方向を含む7ch サラウンド)が距離 感に与える影響について調査した。音だけの場合と、映像が ある場合の違い、また使用する素材の音楽的な文脈の違いに よる影響を比較するために、ME法による5種類の実験をおこ なった。実験結果より、映像の有無による違いに有意差が見 られた。また音楽素材の違いによって高さ方向のチャンネル の有無での距離感の違いに有意差が見られた。
	講演3	13:55	14:20	志民一成(静岡大学教育学 部), 嶋田由美(学習院大学文 学部), 小川容子(岡山大学大 学院教育学研究科)	保育者の歌声に関する嗜好聴取 実験~フォルマントとヴィブラートに 着目して~	音声編集ソフトウェアを用い保育者の歌声のフォルマント とヴィブラートを変化させた音源を作成し、これらの音響属 性が、歌声に対する嗜好にどのように影響するかを検討する ため、幼児と大学生を対象に嗜好実験を実施した。フォルマ ントを変化させた実験では、幼児と音楽教育専攻学生はフォ ルマントを高くした音源を選んだ被験者が多かったのに対 し、幼児教育専攻学生は、フォルマントを低くした音源を選 んだ学生が多かった。また、ヴィブラートを変化させた実験 では、音源作成等に課題が残った。
休憩(15分)		14:20	14:35			

2014年度春季研究発表会プログラム

セッション2 座長 正田 悠先生	講演4	14:35	15:00	◎ 藤山沙紀(九州大学大学院芸術工学研究院), 孫陶洋子, 蔡祺(九州大学大学院芸術工学府), 岩宮眞一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)	音楽と画像の調和感における文脈効果	音楽と画像の調和感に関する文脈効果を明らかにするために、「陽気な」あるいは「陰気な」印象の音楽と画像を用いて調和感の評定実験を行った。連続した2場面よりなる視聴覚刺激において、両場面とも音楽と画像の印象が類似し、両方の印象とも一貫している場合には、後半に呈示した方が調和感が高まる。音楽と画像の印象が反対である刺激においては、後半に呈示するとその不調和感が和らぐ。音楽と画像の印象がともに一貫している場合には、不調和感の緩和効果がより顕著である。音楽と画像の印象が類似している場面と反対である場面の組み合わせでは、後半に呈示された類似している場面の調和感、類似していない場面の不調和感が抑制される。
	講演5	15:00	15:25	米田 涼, 沖 将吾(金沢工業大学大学院工学研究科), 山田 眞司(金沢工業大学)	楽曲の経時的な印象変化と楽曲全体の印象との関係に関する研究	音楽の経時的な印象に関する研究は数多く行われているが、それらは主にクラシック音楽を対象としていた。本研究ではゲーム音楽, ポピュラー音楽, クラシック音楽を用い、音楽ジャンルの違いによる経時的な印象変化の違いを調査した。また、楽曲の経時的な印象変化と、音響特徴量及び楽曲全体の印象との関係についても調査を行った。その結果、音楽ジャンルに関わらず「快さ」の変化は小さく、「覚醒度」の変化は大きいことが分かった。そして、覚醒度の変化はゲーム音楽, ポピュラー音楽, クラシック音楽の順で大きくなる傾向が見られた。また、楽曲全体の覚醒度は、楽曲中の覚醒度変化の特徴的な部分の平均と対応が良いことが明らかとなった。
休憩(15分)		15:25	15:40			
チュートリアル 司会 谷口高士先生		15:40	16:50	難波精一郎(大阪大学)	精神物理学的測定法における音刺激の制御と測定	
休憩(10分)		16:50	17:00			
表彰式・総会		17:00	17:50			
懇親会		18:15	20:15	会場: 愛知県立大学食堂		

2014年度春季研究発表会プログラム

5/25(日)

セッションNo	講演No	開始時間	終了時間	講演者	タイトル	発表要旨
セッション3 座長 米田 涼先生	講演7	9:55	10:20	◎大澤智恵(日本学術振興会/京都市立芸術大学音楽学部), 津崎 実(京都市立芸術大学音楽学部), 木下 博(大阪大学大学院医学系研究科)	ピアノ鍵盤の空間的記憶の正確性分布における左右差と学習効果	ピアノ演奏者のもつ鍵盤の空間的記憶の特性を明らかにするため、ピアノ演奏の熟達者及び非熟達者によるキー位置指示課題の正確性を測定した。実験課題は、参照とするキー位置のみを示したテーブル上で、ターゲット音のキー位置を右手もしくは左手の示指で指示するというものであった。指示位置のエラー平均は両実験参加者群とも白鍵の幅を超えていたが、その正確性には訓練経験の効果がみられた。また参照キーに対する指示キーの空間的左右差の効果が指示に用いる手の効果とは独立にみとめられた。さらに、参照キーへの相対的位置の効果は参照音をC4・C7どちらにおいても同一であったことから、キー位置記憶の分布は、参照点に合わせて可動であることが示唆された。
	講演8	10:20	10:45	◎江村伯夫, 山田真司(金沢工業大学情報フロンティア学部)	テンション和音の印象とその物理量との関係について	本稿では、機能和声の観点において重要な役割を持つ長和音、短和音および属七和音の計3つの和音型によるテンション和音を対象とした印評定実験を実施することにより、ポピュラー音楽を構成する主要な和音が、「協和性」「オシャレさ」「豊穡性」の3次元で構成される印象空間上にマッピングできることを示している。さらに、印象評定実験において得られた心理量と和音の音色に関する種々の物理量との関係について調査した結果、協和性と豊穡性がそれぞれ R 不協和度と和音の最高音高の基本周波数によって概ね説明できることを明らかにし、テンション和音の印象空間を構成する3つの次元のうち2つまでを音響心理学の観点から説明できることを示唆している。
休憩(15分)		10:45	11:00			
	講演9	11:00	11:25	◎日紫喜陽香(愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科)	音楽療法における認知症高齢者の心理的变化	本研究では、音楽療法による認知症高齢者の心理的变化を従来の行動観察に加えて客観的指標として塗り絵技法であるCPMを使って評価検討することを目的とした。その結果、音楽療法前後でCPMへの色塗りが多彩となったり音楽療法への参加が積極的になったりするなどの変化が表れ、自己表現を行う認知症高齢者が増えた。音楽療法によって認知症高齢者の残っている情動機能に音楽が直接働きかけ、カタルシスの解放につながったのではないかと考えられる。

2014年度春季研究発表会プログラム

セッション4 座長 池上真平先生	講演10	11:25	11:50	谷口高士(大阪学院大学情報学部/ヤマハ音楽振興会ヤマハ音楽研究所), 湯浅亜友美(大阪学院大学情報学部), 小川純一(ヤマハ音楽振興会ヤマハ音楽研究所)	音楽聴取時の自律神経系指標と主観的な心地良さ評価の時系列的比較	楽器経験のある大学生を実験参加者として、テンポと調性の異なる18曲の抜粋各30秒を聴取中に、指尖脈波の計測と心地良さの主観評価を連続時間で行った。聴取楽曲ごとに、指尖脈波より算出した心拍(HR)、交感神経の活性化度(LF/HF)、副交感神経の活性化度(HF)、および、主観評価の心地良さ評価の時系列的変化を比較した。また、テンポ(遅い・中間・速い)×調性(有・無)の楽曲タイプごとに、上記の指標の平均を求めて比較した。
	講演11	11:50	12:15	福井 一, 豊島久美子(奈良教育大学教育学部)	音楽聴取(音楽的感動)がステロイド・ホルモン値に与える影響と受容体多型、及び音楽能力との関係 - a pilot study	パイロット・スタディである本研究では、音楽聴取がステロイド・ホルモンに及ぼす影響と、ステロイド・ホルモンの受容体多型と音楽能力との関係について検証した。21名の被験者(男性10名、女性11名)を、音楽的才能群とコントロール群の二群に分けた。被験者は各自が聴取する音楽として、1) chill-inducing music: 強い感動を喚起する音楽(CIM)と 2) disliked music: 嫌いな音楽(DM)の二種類を選んだ。実験の前後で唾液を採取し、ステロイド・ホルモン(testosterone、17-β estradiolおよびcortisol)の値を測定した。DNAを唾液サンプルから抽出し、アンドロゲン受容体(AR)とアルギニンバソプレシン受容体1A(AVPR1A)遺伝子型を測定した。被験者の音楽能力は、Advanced Measures of Music Audiation(AMMA)により調べた。CIMおよびDMの両方の聴取により、男性も女性もcortisol値は有意に減少した。また、男性のtestosterone値は、CIMとDMの両方の聴取で低下した。一方、女性のtestosterone値は、CIMにより増加したが、DMの聴取では減少した。しかしながらこれらの差は有意ではなかった。男性の17-β estradiol値は、CIM・DM両方の音楽で増加したが、女性ではCIMで増加し、DMで減少した。さらに、ARの繰り返し長の長さが多い型(長型)の群よりも、少ない型(短型)の群の方が、AMMAスコアが高かった。AR多型と実験前のtestosterone値の比較は、有意ではなかったが、繰り返しの長さが短いグループのtestosterone値は低く、繰り返しの長さが長いグループは高いtestosterone値を示した。これは、ヒトのAR遺伝子とtestosterone値、および音楽的才能の関係を調べた最初の研究である。
	閉会挨拶など (星野悦子先生, 高橋範行先生)	12:15	12:25			

講演時間: 発表18分, 質疑応答5分, 交代2分

◎は研究選奨選考対象者を示す。

講演6は取り消し。